

# 場面緘黙のある軽度知的障害児の学習過程と教師の教授の特徴 —特別支援学校における数学の授業の事例分析—

東京大学大学院教育学研究科 楠見友輔

**問題関心と目的** 本研究の目的は、数学の課題に取り組む場面緘黙のある軽度知的障害児の学習の特徴と、学習を促す教師の支援の特徴を明らかにすることである。これまで軽度知的障害児が他者との相互行為を通してどのように学習課題に認知的に取り組むかに焦点を当てた研究は寡少であった。しかし、知的障害児は他者からの支援を受けながら独自の方法で学習を行っている（司城、2012）。知的障害児がどのように他者との相互行為を行いながら能動的に学習しているかを明らかにすることは、今後の知的障害児への支援の在り方や知的障害児の主体性に基づく授業を開発していく上で重要であるといえる。

知的障害特別支援学校における数学では、硬貨を用いた学習が多く行われる（Browder ら、2008）。ただし、多くの授業や研究では買い物に必要なスキルを習得することが重視され、認知的操作を要するお金の支払い過程は省略されることが多い（Hord & Bouck, 2012）。しかし、知的障害児が将来自立的に社会参加を行うためには、買い物をパターン的に習得するのではなく、状況に合わせて自ら判断し、行為する力を形成する必要があるだろう。本研究では、知的障害児が自ら考えて買い物における支払いができるようになることを目指した授業を記録し、授業における対象児と教師の行為とフィードバックの連鎖を分析した。

**方法** 知的障害特別支援学校の中学部1年生の学級での買い物の単元（全7回）を対象とし、その中で教師が提示した商品に対して、所持金の中からお釣りが少なくなるように支払うという「ちょ

っと上」の課題を分析対象とした。授業に参加した生徒は3名の軽度知的障害児であり、その内1名の場面緘黙を有する軽度知的障害児（生徒A）と教師の相互行為を分析単位とした。

全授業を1台のビデオカメラで記録し、全生徒と教師の行為と発話を逐語化した。生徒Aの言動は自分で考えた課題を解決しようとする《課題解決行為》（〈高度〉〈中度〉〈低度〉）とそうではない《非課題解決行為》（〈悩む素振り〉〈教師への依存〉〈他者の答えの模倣〉〈当てずっぽうの行為〉）に分類した。教師の言動は、《具体的な指示や提案》《評価》《課題解決行為を促すヒントや質問》とその下位カテゴリーに分類した。7回の授業における「ちょっと上」の課題における生徒Aと他者の相互行為を上のカテゴリーに分類し、結果の解釈を行った。

**結果と考察** 正誤を判定するための評価ではなく、認知的発達と情緒的安定を促すバランスの取れた教師のフィードバックが、生徒Aが認知的に課題に取り組み続けることを可能にしていた。このようなフィードバックは、生徒Aが買い物をパターン的に習得するのではなく、考えて行為することを促していた。数学の課題に対して生徒Aが認知的に取り組みことができたかどうかは、その時点での生徒Aの心理状態の影響を受けていた。また、生徒Aの学習には系統的ではない課題理解の仕方がみられた。学習の成果は完全な理解への到達としてではなく、達成可能性の向上という現れ方をしていた。これらの結果は、知的障害児のメタ認知の制約と関連していることが示唆された。